

# 中央義士会報

創立明治41年

平成26年12月発行 No 66

目次	中央義士会の目指すもの	中島康夫	九
	大石は内匠頭墓前で祭文を読んだか	中島康夫	二
	中山安兵衛	長井寛三	五
	吉良邸測量図	柿崎輝彦	八
	自由広告・今期新入会員紹介	自由広告	十五
	静岡支部勉強会報告	風当一朗	九
	第十二回忠臣蔵博士試験問題	中島康夫	十一
	業務報告	三輪三郎	十四

## 中央義士会の目指すもの

理事長 中島康夫

中央義士会の百六年の歴史を顧みて、その体質を考察してみると、明治四十一年の設立時は、まだ江戸の名残もあり、唯々義士崇拜で集まったことは推量できよう。

第一回の集会は、福岡の崇福寺で四百人が集まり、終わったのが夜の十二時過ぎというから熱気を感じる。

その後、戦争中は戦いを鼓舞する意味で赤穂義士の闘争心を利用されたことも知っている。その時は、やむを得ずで誰が止められたであろうか。しかし、その戦時中も、その思想はどうあれ、必死で義士会を守ってきた方々には敬意を表する。

残念ながら私は、昭和四十年代に中央義士会の存在を知り、五十年代の頃より集会に出席するようになっていったと思う。

その頃の会の雰囲気は、余り感心したようなものではなく、理事というか幹部たちは、派閥を作り、お互い足の引っ張り合い、潰し合いの繰り返しで、それは目も当てられない有様であった事を覚えていて。

悪い理事が一人でも入ると組織は余計なことになり、本来の研究などそっちの

けになつてしまふものである。私は、生涯一度も組織の中に繰り込まれた事がないだけに、嘘や作り事で人を潰すやり方には驚いた。平成十二年、私が会を引き継いだからは、先ず最初に打ち出したのは、政治・宗教・思想に関係ない会を作ろうと思ひ、理事会で発表したことを覚えていて。

唯、会員が個人個人が、どのような政治運動をしようが、どんな宗教をしようが、それには関知するものではない。

ましてや、元禄事件の研究であれば、泉岳寺や関係する多くの寺院も研究の対象になる。大石内蔵助は禅宗だったので、その教えは自然影響してくる。

現在、中央義士会では派閥を禁止しており二人以上で本部批判が目立つと、役員は降りてもらっている。普段は百%話しは聞く団体なので、どんなことでも話してほしいと願っている。総勢二百名以上にもなれば、内部規定も必要になつてくる。文科省からも内部規定の指導があり、早速作り始めると、「そんな会員をしばるものはいらない」とわめく。そんな人物こそ、自家の周りでも争いごとを起こし、役員会には出席なしである。その上、研究もしている訳でもなく、いつも本部に対してグダグダいつているだけである。早速退会扱いにした。

従って、現在は殆ど不純物は取り除いたつもりでいる。

しかし、問題は今の史学界を取り巻く日本人の目である。学識分野で一番遅れている分野である。教壇で学生に「でたらめ」を教えても、大学ではその事は問題にしない。

その上、その間違つた内容を出版物にする。それでも、まだ、出版社も気づかない。更に、その問題を試験問題に出題する。ここでやつと外部の人間に指摘され、「今後の参考になります」で幕引きである。それを、スポンサーに伝えると「いろいろな考えがある」と、ピシャツと戸を閉められてしまう。

ここまで来ても、何の責任問題にもならないのが、今の日本の史学界である。

歴史番組など拝見すると、漫才師と見間違ふほど、饒舌ででたらめなことばかり捲し立てる先生もいる。

一方、逆説の日本史などと称して、恰も史実が如き出版物を発売して、世人を惑わせる。その内容は曲学阿世である。それでも社会問題にならないのが、今の日本である。

「元禄赤穂事件」は、この「魔煙」に巻き込まれては絶対にならない。心ある者は義士会に集まり、わずかながらも、真実の道を共に歩もうではないか。

# 「大石は内匠頭墓前で祭文を読んだ」か

理事長 中島康夫

平成七年四月二日、義士近松勘六の家僕甚三郎の子孫近松重義氏を訪ね、近松家の好意により、同家に三百年間非公開の「甚三郎文書」の調査を許された。

近松家には、二十七通の元禄事件関係者の書状と甚三郎が大石内蔵助（以下大石という）から拝領の紙子羽織、近松勘六の財布、帯、印籠、潮田又之丞の認印なども保存されていた。

これらの一連の書状、関係遺物により一冊の出版物ができた。

それが、平成十二年十一月三日、（株）三五館出版の「大石内蔵助最期の密使」（以下「密使」という）である。

しかし、その後平成二十六年になり、「易水連袂録」（以下「易水」という）を調べ直している内、内匠頭墓前での大石の祭文読み上げは、現実に行われたのではないかと思うようになった。

そこで、平成十二年発行の拙著「密使」の内、「義士墓前報告の一件」の解説を反故にして、読者の方には詫びて、改めて考察をし直すことにした。

そのため、改めて次頁に「甚三郎文書」の内「義士墓前報告の一件」「史料A」と、「易水」の内より「泉岳寺和尚口上書之事」「史料B」を掲示して、次期六月号会報で調査報告する予定である。

そもそも、この「祭文」は、全国の宝物館及び個人住宅などで飾られている文書ではあるが、真書があるわけではない。

まして、書き出しから寺坂吉右衛門を寺岡平右衛門などと書き写しているため、どの研究者も「祭文」の存在すらみとめるに至っていない。

いのが現状である。

しかし、実際吉良邸より泉岳寺へ引揚げてきた四十四人は、上野介の首を挙げて内匠頭の墓前に捧げることが最終目的であったはずである。

義士達たちのこの二年間の苦渋の末、墓前に佇み一言もないとは思わなくなってきたのである。

そんな折り、「易水」の作者である「ある旗本」が討入りの翌日に泉岳寺住職と会って取材していることに気づいたのである。

そして、その「易水」の内容が、それより先に写したとされる「甚三郎文書」「史料B」と一致するということは、どちらの史料も内容が事実であることを示していることに気づいたのである。

読者の方も「史料A」と「史料B」を比定されると解るように、双方共、同義語が多数見つかると思う。

更に、「史料A」が取材に出た「ある旗本」の足取りと「史料B」は、近松勘六が速記したものとすると、両者の接点があるとも思えない。その「史料A」と「史料B」がやや同文なのである。

実は、この「祭文」といわれる文章は、この元禄十五年十二月十五日から始まり、その後「赤穂義人録」「泉岳寺書上」「義士実録」「赤城義臣伝」「忠誠後鑑録」「赤穂鐘秀記」と、それ以後の元禄事件関係のあらゆる「自伝」「覚書」に引き継がれて現代に至っている。

これらの全ての根源は「易水（史料A）」と見てよい。そして、「易水」を証明するのが「史料B」である。

次期六月号には、更に、解明された文章を載せたいと思っている。

読者の方も、何か気がついた事があれば遠慮なくご連絡いただきたい。

【史料A】

「易水連袂」より泉岳寺和尚口上書之事

泉岳寺和尚口上書之事

今朝五時分 何事トハ不<sub>レ</sub>知 大勢鍵ヲ持テ 手負ヲ肩ニ掛ケ寺内へ欠<sub>レ</sub>込<sub>ミ</sub>申候 寺中夥敷致<sub>シ</sub>騒動 先門ヲ差堅メ申候 扱<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候ハ 浅野内匠家来今朝主ノ敵吉良上野介殿ヲ討取申候テ 是マデ参上申候 立退候テ御寺へ掛込<sub>ミ</sub>申分ニテ無<sub>レ</sub>之候 亦於<sub>ニ</sub>御寺ニ狼藉ノ振舞仕間敷候 上野介首内匠墓所へ供へ申マデニテ御座候 夫マデハ御門差堅メ御指置可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候ト申捨テ 尤墓所へ通<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候 皆打ツレ寮内ヨリ罷イデ候へバ 香爐ニ抹香御借シ候へト被<sub>レ</sub>申候故出シ渡シ申候へバ 右ノ大勢墓所ノ側ノ手桶ニ水クミ来リ 首ヲ洗候イテ内匠殿石塔ノ二段目ニ備へ 皆々石塔ヲ取巻 畏リ 手ヲ地ニツキ居被<sub>レ</sub>申候テ 首ヲ洗ナド彼是致シ候内ニ 内蔵助筆紙ヲカリ被<sub>レ</sub>申候故サシイダシ候へバ 何ヤラソ書認メ申サレ候 後ニ是ヲ見候へバ墓所ニテ読申サレ候口上書ニテ御座候 其後石塔ノ上段ニ柄ヲ石塔へ向ケ指置キ内蔵助一番ニ名ノリ焼香致シ 右ノ小合口ヲ取上ゲ 上野介殿首ノ上ニ三度當テ退キ 残りノ面々一人々々ニ名ノリ候テ焼香相済 扱<sub>レ</sub>内蔵助口上書ヲ高ク読上被<sub>レ</sub>申候残りノ輩亦墓所ヲ取巻 平伏シ居申サレ候 右ノ口上書讀シマヒ申ト皆一同ニ泣キ候テ 亦面々焼香致シ 扱<sub>レ</sub>相済ミ候テ首ヲ本堂へ致持参此首最早入用無<sub>レ</sub>之候 主君ニハ敵ニテ候へドモ我等法外ノ至リニ存候へバ 御出家ノ御事ニ候間比上ハ宜ク御取計ト候へト被<sub>レ</sub>申 和尚受トリテ則佛前へ置被<sub>レ</sub>申候

- 一 皆々被<sub>レ</sub>申候ハ 最早此世之礼儀 我等モ相済申候 上野介殿家来唯今マデ我等存候通り 嘸々残念ニ可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候へバ 定テ追掛可<sub>レ</sub>参候へバ 亦彈正様モ米沢十五万石御指上候トテ御実父様ノ御首 御自身御出候而御取上ゲ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>存候 モハヤ此上ハ家来共無事ニ罷成御門外へ出候テ四十七人ノ者共之首可<sub>レ</sub>進候 早々御門御開候而可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下度 寺中ニテハ夢々狼藉之働仕間敷候間可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>御心安<sub>レ</sub>候
- 一 和尚ヨリ粥ヲ振舞被<sub>レ</sub>申候へバ 皆々載 土中之死骨不<sub>レ</sub>存寄 和尚様ノ御巾ヒニ預リ申候トテ笑ヒ申候 其内給仕致候者上野介殿御父子如何ト承候へバ 随分見事成御働ニテ御座候 家来衆モ恥シカラヌ働ニテ候 内蔵助口上書墓所ニ捨置罷帰リ候 九ツ打候右捨置候口上書写シ掛<sub>ニ</sub>御日<sub>ニ</sub>候

元禄十五年壬午七月十五日唯今面々名乗申候通 大石内蔵助ヲ初メ足輕寺岡吉右衛門マデ 四十七人進死臣等謹而奉告

亡君之尊靈ハ去歲三月十四日 尊君刃傷<sub>ニ</sub>上野介殿<sub>ニ</sub>尊君へ御切腹 上野介殿ハ御存生<sub>レ</sub>御公裁之上ハ 上ノ御怒リ拳<sub>ニ</sub>恐入<sub>レ</sub>候へドモ 我等ハ尊君之臣ニテ尊君ノ食禄ス 然レバ俱ニ不<sub>レ</sub>載<sub>レ</sub>天之儀 難<sub>レ</sub>黙止 同ク不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>地之文無恥不<sub>レ</sub>申 然ドモ請<sub>レ</sub>櫻可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下之元 咎ナク 昼夜感涙シ候マデニ御座候 譬抱ムナシク相果候トモ 於<sub>ニ</sub>泉下<sub>ニ</sub>申ベキノ詞無<sub>レ</sub>之候 依<sub>レ</sub>之 奉<sub>レ</sub>繼<sub>ニ</sub>御意趣<sub>ニ</sub>べく存候ニヨリ 以来 今日ヲ相待候事一日三秋ノ思ヒニ御座候 四十七人之輩雨ニ立 雪ニイ<sub>レ</sub>一日三日ニ漸ク一食シ候 老衰ノ者病身ノ者シベシバ 遂<sub>ニ</sub>死<sub>ニ</sub>申候へドモ蟻螂ガ腋ヲ頼<sub>ミ</sub>笑ヒテ後世ニトリ イヨイヨ尊君ノ恥辱ヲ残シ可<sub>レ</sub>申カ延留仕候へドモ昨夜各申上野介殿御宅へ推参仕候 則上野介ヲ御供申候テ是マデ参上仕候 此合口ハ尊君昔御秘蔵ニテ我等ニ被<sub>レ</sub>下置<sub>レ</sub>候 只今返上仕候 御墓ノ下御尊靈於<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之バ再御手ヲオロサレ御鬱憤ヲ遂<sub>ニ</sub>給<sub>レ</sub> 右ノ意趣四十七人一同ニ申上候

右ハ大杉原貳枚ニ書申候 (校訂者註 右の祭文は原文のまま掲ぐ)



義士墓前報告一件

「史料B」

墓所に御座候趣写申候

元禄十五年壬午十二月十五日、唯今銘々名乗候通大石内蔵之介初足輕寺坂迄都合四拾七人謹而奉告亡君尊靈、去年三月十四日尊君刃傷吉良上野之介殿之儀、我等共不存子細然所に、尊君ハ切腹上野之介殿者御存生二候、御公裁之上我等共如此之企不有、尊君御心□□□奉恐入候共、我等共□□ハ

尊君之從ニ而尊君之祿を食申俱不戴天之儀、回不踏地之文難黙止候、空ク相果候者、於泉下可申上何や覽書申候、書仕廻候而懷中より小脇指を取出し、鞘を抜候而石塔之上段ニ柄ヲ石塔の方へ向ケ置候而退キ忝番に名を名乗、致焼香右之小脇指ヲ取、上野之介殿首に三度当脇指を本之ことく差置候而退申候、残ル面々一人一人に名乗焼香仕候、何も焼香相濟候後御書申候物ヲ内蔵之介高ク誦申候、其内何も首を地に付居申候、誦□廻候而何やらん□□申、一同に泣申候、暫有之又々何も焼香仕候而首於本堂へ持參此首最早入用に無之候、高家之御歴々之首穢申儀法外之至に存候、御出家之御事候間、宜御取計候へと則和尚ニ相渡申候、扱皆々申候者最□今生君從之禮儀我等共者是迄ニて仕廻候、上野之介殿御家来只今迄□□□□無之無念ニ可有之候、定而□掛可□參候、上枚殿ニも米沢拾五万石之差上候共御自身ニ御出、御実父之御首御上ケ可被成候、我等共者是迄之仕合ニて事濟たるニて右之御方へ手むかひ仕候も無道に候間、無刀ニ罷成御門外へ罷出我々首進可申候、早々御門御開置候へと申候、粥を出シ候へハ何も戴申所之死骨不存寄御寺へ參和尚様之御苦勞に預り成仏無疑と笑申候、此節九ツ時ニ□御座候人数四拾六人參候、

内蔵之介書誦仕物

詞無御座候如斯可奉繼御意趣存立申合候以来、今日迄相待候事一日三秋之思ニ御座候、四拾七人之者共忘寝食雨ニ立、又雪ニイ老衰之者病身之者屢死を進申候得共蠅螂斧を頼之笑ヲ相和弥々尊君之秘辱を殘可申々と述留仕候、今夜□□申合上野之介殿宅江推參申、則上野之助殿御供申是迄參上仕候、此合□□ハ、尊君首御秘藏被成我等ニ被下置候、只今進上仕候御墓下に尊靈於有之者□□下御手可被遂御□□懷右之趣、四拾七人之從等謹而申上候、以上、

(※□□の部分は解読不明)

「大石内蔵助の密使」より、義士墓前報告一件の訳文

肉親存書讀物  
初之者ハ此身  
傳之能相立下食業  
今是相待事一日三秋  
思之此身此後  
忘寝食雨立名  
乞妻之志病力  
死進下は此物  
と秋之笑相和  
高口ハ私辱  
之當行今夜  
上野之助殿  
と親之秘辱

「甚三郎文書」の内、近松公勘六の書と思われる内蔵助書誦仕物の真書の写し



### 安兵衛の幼年時代

中山安兵衛武庸は寛文十年五月（一六七〇）に越後は新発田藩家中屋敷の外ヶ輪にて誕生した。前名は応庸である。父は彌次右衛門、中山家の二代目を襲名していた。初代も彌次衛門と名のり、新発田藩六万石・溝口伯耆守秀勝の江戸詰めの家臣で禄高は二百石を給せられていた。母のいは安兵衛誕生の折に死別する。以来安兵衛は祖母に当たる糸によって育てられた。秀勝の室に当たる曾祖母は寛永十一年（一六三四）に死去する。安兵衛が三歳の時に祖母も死去する。その後安兵衛は腹違いの姉きん（寛文元年誕生）たちと一緒に父の元で暮らす。その間に武家の嫡男としての心得、剣術の手解き、学問や手習いなどを授かる。延宝四年（一六七六）十六歳になる姉きんは新発田藩にある牛崎村の長井彌五左衛門（当時三五歳）の元に嫁ぐ。安兵衛が六歳のときである。以来十三歳になるまで安兵衛は父の手一つで育てられる。

筆者の直系の先祖である前彌兵衛督長井利直（通称源七郎）の長女が丹羽長秀に仕えた溝口秀勝の室となった。長秀は織田信長に仕えた後、豊臣秀吉の家臣になった安土桃山時代の武将である。秀勝の娘である糸が丹羽秀友を先祖に持ち新

発田藩の重臣役を勤めた溝口四郎兵衛へ嫁ぎ五女が誕生する。糸がその後中山彌次右衛門と婚姻を結び安兵衛応庸が生れる。

### 安兵衛の少年時代

江戸時代の新発田藩は関ヶ原の合戦では東軍に付くも外様の扱いを受けていた。元禄になると各藩とも質実剛健や節約を旨とする時代を迎えていた。新発田藩も財政逼迫による肅清政策を敷かざるをえない境遇にあった。

天和三年（一六八三）安兵衛の父は新発田城本丸巽櫓の焼失の咎を問われ禄を没収された。失意の余り病に臥して死去、その後菩提寺の長徳寺に葬られる。病死の原因の詳細は不明ともされる。彌次衛門の剛直な気質による確執が不運へと導いたとも云われる。安兵衛の父が充分な取り調べも受けないままに非業の死を遂げて以来、中山家は新発田城下より遠ざけられる。

十三歳になるも、武士の家に生まれながら土官することも叶わない安兵衛は両親を失い頼る人としていなかった。祖父方の溝口四郎兵衛の元に預けられる。祖父は三年前に隠居し、家はいとこの三郎兵衛が継いでいた。そんなある夜、祖父四郎兵衛は自らの愛刀を安兵衛に形見として授ける。刀剣の銘は越前住相模守藤原国綱、安兵衛が江戸へ上るまで常用していた長刀である。貞亨二年（一六八五）に祖父四郎兵衛が死去する。その後居辛くなった安兵衛は新発田城下の四郎兵衛宅を後にし、実の姉きんの嫁ぎ先である新発田藩の長井彌五左衛門の館に向かう。長井家の口伝によると「安兵衛は長井家によって匿われた」ということである。

### 長井家について

長井利直の長男清左衛門は客分として五千石を賜わり新発田城の縄張りをする。次女は山内一豊の弟の康豊に嫁ぎ代々続く山内家の礎を築く。三男が長井三郎左衛門家を興し、佐藤條右衛門の姉が嫁ぐ。安兵衛は初代城主秀勝の曾孫に相当する。利直の父は藤左衛門尉景弘、祖父は藤左衛門尉長弘、曾祖父は七郎左衛門尉秀弘である。

長井家の口伝によると齋藤道三は娘婿の織田信長に「長井家は名家故討つな」と命じたと言う。戦国時代（一四六七―一五六六）の長井家の先祖に関する記述が『戦国時代論』『岐阜市史』（勝俣鎮夫著）に記されている。要約して以下に記す。

寛正三年（一四六二）長井七郎左衛門尉秀弘が「善恵寺細目郷納帳写」に署名。秀弘明応四年（一四九五）勃発した船田の合戦にて五月九日自害。

永正元年（一五〇四）長井越中守秀弘の子の藤左衛門尉（のち越中守）長弘が登場。「この長井氏は鎌倉時代の茜部荘の地頭であった長井氏の末裔である」と勝俣鎮夫氏は記す。大永五年（一五二五）「濃州も錯乱し・長井一類が占拠した」（上杉家文書）。「長井一類とは長井藤左衛門尉長弘と長井新左衛門尉である」と記す。

天文二年（一五三三）長井藤左衛門尉長弘六八歳にて病死。天文二年十一月二六日長井藤左衛門尉景弘が長滝寺の寺法「長井景弘・同規秀蓮著」に長井新九郎規秀（後の齋藤道三）と連署。「長井惣領家は長弘のあと藤左衛門尉景弘が継いだことがわかる」と記す。



天文三年（一五三四）長井家惣領を継いだ藤左衛門尉景弘は地位を追われる。

天文四年（一五三五）長良川の大氾濫、家屋の流失一万軒。美濃の国内再び兵火に包まれ瑞龍寺焼失、文人等は争乱を避け他国へ移動すると記す。

景弘は美濃の国を出国し朝倉家を頼って大聖寺へ向かう。

その後長井景弘の嫡男長井前彌兵衛督利直が家督を継ぐ。利直は「越後はいい処故おいで下さい」（長井家の口伝）の娘の誘いも果たせぬままに大聖寺にて死去する。慶長三年（一五九八）に利直の嫡男前左衛門督長井清左衛門が大聖寺から新天地を求めて越後の新発田に移り住む。清左衛門は父である前彌兵衛督利直（通称源七郎）を高祖とし越後長井家の再興を図る。新発田の城下に館を構えた清左衛門は自宅屋敷内にある掛蔵稻荷神社にて祀られ現在に至っている。

長井家の先祖に当たる鎌倉幕府創設期の重臣大江廣元には四人の男子がいた。承久の乱で二男である長井時廣が大江家の家督を継ぎ、以来江家の嫡流をそのまま引き継ぎ幕府の要職を司る。一方朝廷方について敗れた長男の大江親廣は山形県の寒河江へ逃れる。長井時廣は山形県の長井市の領地が与えられ現在に至る。因みに当時の時廣は従五位・左兵衛尉・左衛門尉・関東評定衆などの要職を歴任した。その後の建武の中興を経て長井家は足利幕府の要職を引き継いでゆく（『国史大系』（吉川弘文館）。大江廣元を先祖とする大江家、長井家、那浪家、毛利家一族は一品の家紋を今に共有する。

鎌倉幕府の公用記録書として知られる『吾妻鏡』は大江廣元が編纂したと云われる。承久の乱後は長井時廣の嫡男の泰秀、時秀、宗秀、貞秀などが歴史書に登場、宗秀も編纂に携わると『吾妻鏡』は記す。安兵衛は彌五左衛門より『吾妻鏡』のあらましや『論語』『武士道』『孫子の兵法』『陶淵明』などをはじめとする膨大な書籍の教えを受けた。

### 長井家と安兵衛

安兵衛は姉きんの住む新発田藩の領地の外れに居を構える長井家のある牛崎村に着く。長井家は初代城主溝口秀勝の室の実家でもある。新発田城下から数里の距離のある牛崎村は日本有数の穀倉地帯であり蒲原平野の風景もまた雄大な土地であった。

越後長井家は彌五右衛門の代より新発田から牛崎村に移った。当時はその嫡男の彌五左衛門と安兵衛の姉きん夫妻が暮らしていた。前左衛門尉の職位を持つ武家の家であった。美濃の国を出た長井利直は大聖寺に、嫡男の清左衛門は客分の身分で大聖寺から新発田城下に移り、清左衛門の嫡男の彌五郎は水原にそれぞれの館を構える家系であった。諸般の事情も折り重なり越後に移って以来の四代目に当たる彌五右衛門の代より新発田城下の遙か遠方の牛崎村に屋敷を移した。広大な敷地には老木や数人が手を廻しても廻しきれないほどの樺の大木が生い茂り、屋敷の周りには堀が張り巡らされていた。辺りは静まりかえり、巣くう鷹が空を舞い、夕方にたると梟が啼いた。

五代当主彌五左衛門は温厚な人柄で学問への造詣も深い人物であった。彌五左衛門と姉きんは少年安兵衛を自身の嫡男の兄弟同然のように迎え

た。当主より学問の手ほどきを受け、日夜一心に勉強に励んだ。剣術の鍛錬にも励んだ。ときには大庄屋を構える親戚長井三郎左衛門の道場へ通い、剣の腕を磨いた。

安兵衛は少年時代より見事な筆跡の持ち主であった。学問の傍ら長井家の暮しむきに関する日常の出来事を克明に書き記すことを日課とした。その書物は出火や不注意により焼失してしまふ。少年時代の安兵衛にとって近くの信濃川近辺が主な遊び場であった。

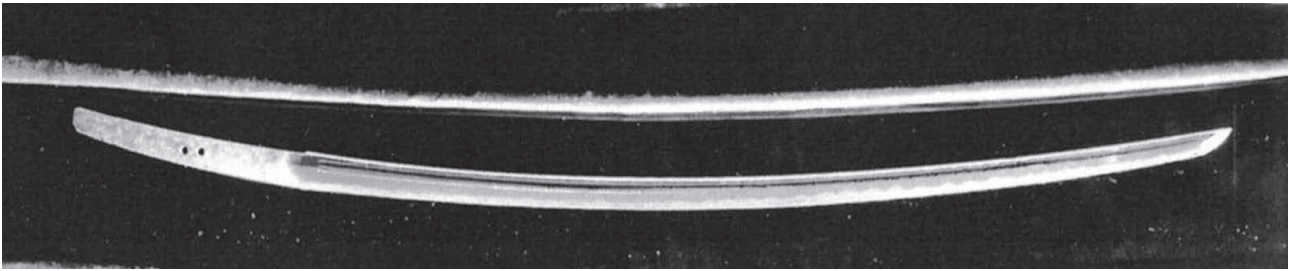
長井家に暮らして四年が経過、安兵衛は十八歳になる。白根町の立役者袖山半兵衛や小須戸村の佐藤條右衛門たちとも交流を深めていった。そして旧主への帰参も叶わぬことを感じ取った安兵衛は次第に長井家を離れる決意を固める。その折、室町時代より家宝として長井家に伝わる名刀の康光を彌五左衛門・きん夫妻より譲り受ける。また夫妻は路銀の五両を懐に忍ばせ、若い安兵衛の門出を祝した。安兵衛は牛崎村を出てから三条、長岡城下、十日町を経由し三国峠越えをした。その後中山道を通って江戸に入ったのである。

三百年余の間、安兵衛が常用した長刀、祖父堀部彌兵衛命名の安兵衛の嫡男「安之助」の誕生を知らせる数通の手紙、また安兵衛が彌五左衛門に送った可笑（大石内蔵助の雅号）による蘭の画に正福寺の和尚良雪が賛をした「為香葉撰」の一幅などが長井家に保管されていた。

### その後の長井家

江戸末期には、長井家当主は代々彌五左衛門の名を踏襲していた。当時の長井家では越後私塾「尊孝館」の額を掲げて塾生に学問の道を教授してい

た。  
『江戸繁盛記』（一八三一）を書き幕府より江戸に廻せられた寺門静軒は長いこと当尊孝館に逗留した。尊孝館には膨大な数の蔵書があり学問をするに事欠くことがなかった。静軒は読書を専らにする暮しを送り、『新濁繁盛記』の構想も練った。また当主「彌五左衛門」の名をそのまま自らの通称名にした。夏の盛り当家の庭に坐し自ら筆に流麗な漢詩を認めた。また江戸の絵師谷文晁に依頼した神農の絵にも静軒が賛をしている。静軒と交流の深かった吉田松陰の筆による画や谷文晁に絵の手解き受けた渡辺崋山の花の絵に儒学者藤田東湖が賛をした一幅なども当家に残っている。また多くの塾生が受講のお礼に書き残していった色紙や膨大な書籍の目録だけが当時を偲ぶよすがとなっている。  
それ以降の長井家は医者の子孫、その嫡男で医者の子孫が代を引き継ぎ明治時代を迎える。明治八年一念発起した松堂は戸頭村にあった菩提寺の長願寺より一族の墓石一切を自宅の屋敷内に移転させた。その際松堂は墓碑に安兵衛の愛刀や遺品を埋葬すると記す。明治新政府からの爵位授与の申し出を松堂の嫡男彌五一郎が鄭重に辞退する。当時の長井家は信濃川水害に備え私財を擲ってまで高い堤防を築いた。今は牛崎村に二百坪の墓地のみが残るだけである。



太刀銘—康光 堀部安兵衛所用太刀 銀象嵌銘—堀部武庸秘  
室町時代—15c 刃長 76.6 東京国立博物館蔵



安兵衛が江戸に立つまで愛用していた長刀 国綱  
長井安が新発田市に寄贈

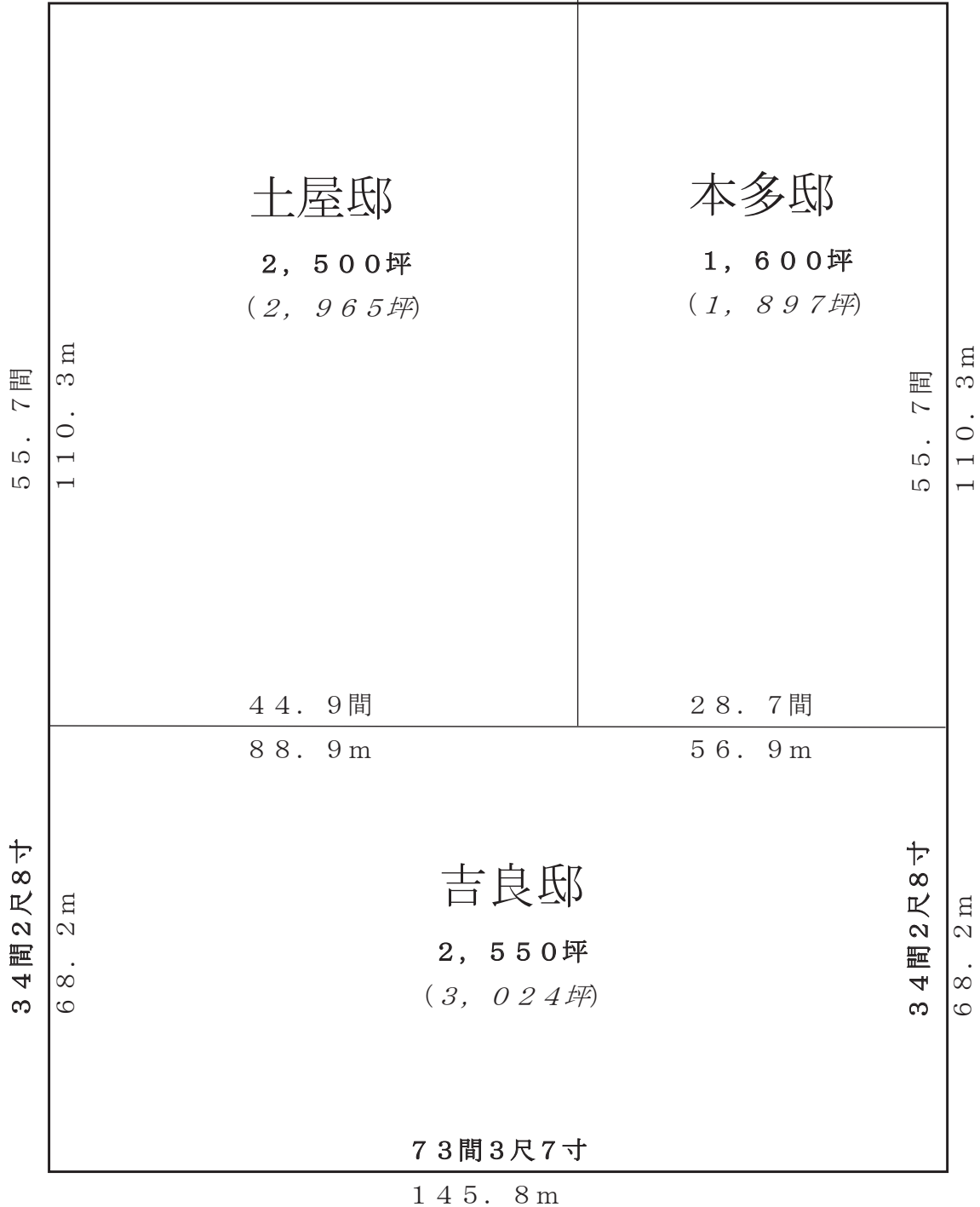
本所吉良邸測量図

企画者：中島康夫  
測量者：柿崎輝彦



下図寸法は、図面が記された当時の1間=1.98m換算にて表示。

※(坪) 1間=1.818mとした場合

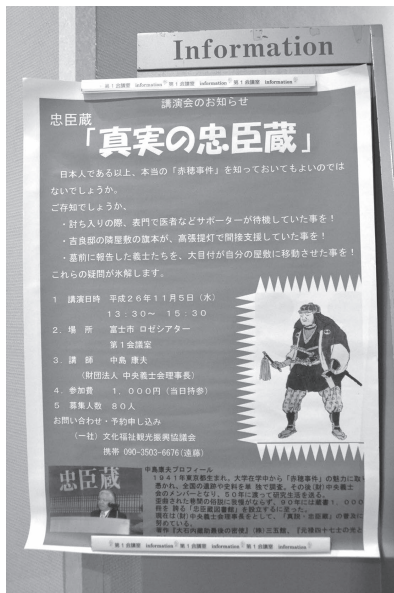


注) 土屋邸・本多邸の周辺距離は、隣接する吉良邸の東西距離73間3尺7寸から各々の坪数より逆算したものであり参考値である。

太字は実際の図面上に記されている数字。

柿崎輝彦

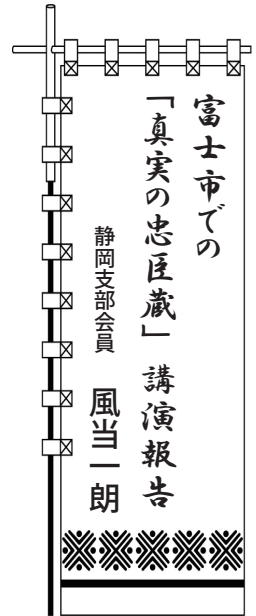




講演会ポスター

平成二十六年十一月五日（水）、富士市の文化会館（ロゼシアター）にて中島理事長による講演会・「真実の忠臣蔵」が開かれました。昨年、遠藤信夫理事のご尽力で富士市に中央義士会静岡支部が発足し、今回は富士市の歴史愛好家をお誘いしての講演でした。平日であるにもかかわらず四十三名の愛好家が集まり、中島理事長が語る「真実の忠臣蔵」の実話に堪能しました。

中央義士会のメンバーにはおなじみの内容かもしれないませんが、富士市のメンバーにとっては大変新鮮で、参加者は興奮気味でした。



梶川與惣兵衛日記にもとづく松之廊下での刃傷沙汰になるまでの現場の様子、一級資料を引用しながらの刃傷沙汰になる原因、討入りに際して用意された口上書、討入り当日の戦闘状況、吉良上野介が炭小屋で見つかり首を刎ねられるまでの生々しい状況、泉岳寺に凱旋し、泉岳寺に夜八時迄留め置かれていた様子、四家お預け、元禄十六年二月四日に四十六名が切腹する様子もありありと・・・。

朝起きてから、夜寝る迄赤穂義士のことばかり考えている中島理事長の人柄から溢れ出る講演に、参加者一同、惹き付けられました。ユーモアを交えつつ、「間違えがあったら何時でも潔く頭を丸めます」との真摯な姿も魅力でした。



受付の様子



中島理事長講演中

近松勘六行重が持っていたという討入り口上書の控え（平成になって理事長が甚三郎の子孫からコピーをもらった）、討入り後お預かり先の細川家で原物右衛門元辰が書いた大石内蔵助の親類書等、巻物状になった一級資料を目の前にできたことも大変新鮮でした。

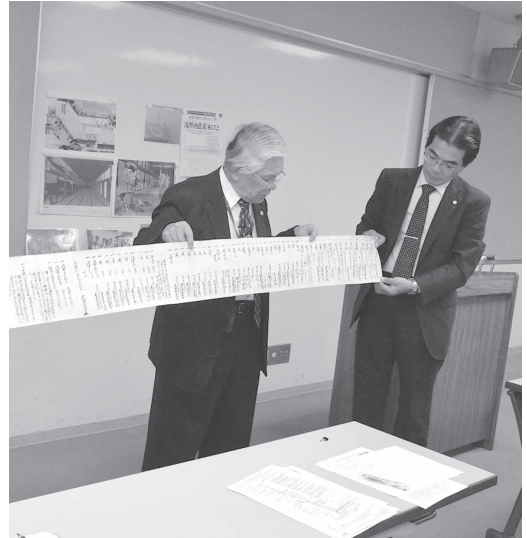
口上書も討入り当日玄関先にかかげたばかりでなく、義士達が懐にもっていたこと、内蔵助が筆まめに多くの人に送った長い手紙が残っており、そこから様々な真実があらわにされました。

新撰組でも井伊家の桜田騒動でも、襲った方にも犠牲者がでたのに赤穂義士だけは一人の犠牲者もでなかったという奇跡の成功率は、真実の姿を知ることによって多くを学ぶことができると思います。

中島理事長は「易水連袂録」という史料に特に注目され、この著者はある旗本・天野弥五右衛門ではないかと推定されておられます。義士達が切腹した一ヶ月後に脱稿されており、この文献の研究から、あらたな真実が発見されるのではないかと期待がたかまります。

朝まで生テレビでの井沢元彦氏との激論や、東京大学教授・お茶の水大学などのそうそうたる教授とのなまなましい裏話は、聞いていて爽快感を感じました。

質問タイムは二〇分ほどありましたが、次々と質問が出、それに中島理事長が具体的な回答をされることで、益々興味が沸き、続編が楽しみな講演会となりました。例えば、義士の中で唯一人延享四年十月六日八十三才まで生き続けた寺坂吉右衛門の生涯とか。



大石内蔵助の親類書を説明



聴講の皆様

「富士市での講演は、今回が初めてでしたが、熱烈な愛好家がかかりおられることが解り、これからの発展が期待されます。

来年から月に一度、富士市に足を運び、少しでも多くの市民の皆様へ、歴史の真実を解いて行かれるということですので楽しみにしている次第です。

主催は一般社団法人文化福祉観光振興協議会でしたが、福祉の増進と観光振興を柱として文化振興と地域活性化を目的に富士市に設立された団体



静岡支部長遠藤信夫氏挨拶

です。昨年、世界文化遺産に認定された富士山の地元での発展が楽しみな団体です。

最後に、十月に発行されたばかりの中島理事長が書かれた「新大石内蔵助の生涯」が紹介されました。一級資料のみに準拠して真実の姿が浮き彫りにされ極めて簡潔な文体に配列されており、大変な迫力を感じさせられます。現在一番進んでいる忠臣蔵ではないでしょうか。出来るだけ多くの人に読んでもらいたいと願っております。



# 創立106年記念

## 第12回忠臣蔵博士試験問題

### [受験資格について]

- ・ 受験料は無料ですが、受験資格は会員に限ります。

### [解答票の配布について]

- ・ 第 1 2 回忠臣蔵博士試験の解答票は、勉強会などで配布致します。別途必要な方は本部（FAX 048-973-3790）までご連絡下さい。FAXでお送りいたします。または、メールで中央義士会のメール（chuogishikai@tokyo.email.ne.jp）までご連絡下さい。折り返しメールでお送りいたします。

### [解答票の送付]

- ・ 解答票は本部まで（FAX 048-973-3790）FAXで送付下さい。

### [解答に際しての注意事項]

- ・ 試験問題の解答を調べるために、お電話等で各施設へ直接問い合わせることはおやめ下さい。
- ・ 同じく、会員同士でも試験のための連絡はおやめ下さい。特に申し上げたいのは、連絡しあっている方は、同じ答えで間違っているのですぐにわかります。
- ・ 問題をよく読んで、一言一言理解した上で、解答して下さい。問題を読み間違えないようお願い致します。ひっかけ問題がたくさん出題されています。
- ・ 文章での解答については、解答者が理解しているかを判断基準にさせていただきます。
- ・ 文章での解答については、要領を得ない場合は失点とします。
- ・ 解答がないと思われる場合は「なし」とだけ記入して下さい。
- ・ 文章を求める答えで、別紙を添付しても構いません。
- ・ **最終提出日は、平成 27 年 10 月末日です。**

平成 26 年 12 月

第1問	平成17年、中央義士会は「赤穂義士の引揚げ」という冊子を発刊いたしました。その冊子に記載の引揚げコースで、多少でも疑問の箇所があれば示して下さい。
第2問	下記の方で、吉原の花魁(おいらん)を身請けした方がおります。どなたでしょうか。 ①浅野采女      ②浅野壱岐守      ③浅野長照      ④浅野綱長
第3問	京都府右京区の広沢池と細井広沢とは、何か関係があるのでしょうか。知っている限りのことを述べて下さい。
第4問	討入り後、吉良邸を検分派遣された安部式部という御目付は、後にテレビドラマで有名なお役に拝命されますが、そのお役とは何でしょうか。
第5問	元禄事件の関係者で、篆刻の分野で、日本の篆刻の中興の祖といわれている方がおります。どなたでしょうか。



第6問	細井広沢が柳沢家を去るに当たって、ある幕閣の人物がからんだことが原因とされていますが、どなたでしょうか。
第7問	元禄事件関係者で、「蓬」(よもぎ)のようなかれんな生き方をしたのでしょうか、そのような戒名を付けられた方がおります。どなたでしょうか。
第8問	庄田下総守の屋敷跡には、現在、どのような施設が建っているのでしょうか。
第9問	浅野長政は晩年「長政」と呼ばれるようになりますが、秀吉全盛のころはなんと呼ばれていたのでしょうか。
第10問	浅野内匠頭が、庭前切腹した理由として近年、田村家の御子孫の方は、その理由を伝承されていると発表されました。なぜ庭前で切腹しなければならなかったのでしょうか。
第11問	現在、赤穂花岳寺の義士墓入り口に3m程の句碑が建っております。どなたの句碑でしょうか。
第12問	現在、大覚寺というお寺に山号額が残っており、元禄事件関係者の筆跡という伝説ですが、どなたの筆跡といわれているのでしょうか。
第13問	義士関係のお寺で、「鳴らずの鐘」といわれている鐘があるところがありますが、なんというお寺でしょうか。
第14問	吉田忠左衛門の娘に「さん」という方がおりますが、もう一人「さん」という方がおります。どなたのどのような方でしょうか。
第15問	劇場のパンフレットや観光協会のパンフレットなどを拝見しますと、元禄事件に関して基本的な間違いが多く見られます。どうしてこのような単純な間違いの多いパンフレットに税金をかけて作るのでしょうか。感想を述べて下さい。
第16問	両国橋の東詰、特に義士たちが休息した場所が石置き場であったことは多くの史料に確認できますが、その一つを挙げて下さい。
第17問	寺坂吉右衛門を陪臣とか、吉田忠左衛門が主人とか歴史の基本も解していない方が先生と呼ばれて、平気で教鞭をとっておられるのはなぜでしょうか。
第18問	近年、テレビドラマなどで「信長のシェフ」とか「信長は女だった」とかの映像が目には余りますが、歴史家としてのあなたは面白いと思いますか。
第19問	土芥寇讎記の内容が余り当てにならない所以を示して下さい。

第 20 問	堀内伝右衛門が義士の手紙を家族の元へ持ち歩いていましたが、このことが幕府にわかったときのため、いつでも胸に持ち歩いていた書状を、松岡脩三氏は何と命名していたでしょうか。
第 21 問	「必死連名録」を書いたのはどなたでしょうか。
第 22 問	「衣食住身も軽くして心は高く思いて道を正せよ」はどなたの詠でしょうか。
第 23 問	「こころざし石にたとへん武士の名こそくちさぬ苔の下まで」の詠がありますが、この詠の石碑は現在どこにあるのでしょうか。現存する所を答えて下さい。
第 24 問	義士研究家の松岡脩三氏は昭和9年に「自分は赤穂義士が無上に好きである」と述べています。松岡氏を義士研究へと導いた方の名前を書いて下さい。
第 25 問	堀部安兵衛の自筆と思われる断簡に「悴安之助」とあり、実子がいるかのような表現ですが、この件について意見を述べて下さい。特にいつの時期の子か、母親は誰か、などを中心に述べて下さい。
第 26 問	近年「元禄事件」を「テロ」と表現される方が少しずつですがおります。このことについて意見を述べて下さい。「元禄事件」がテロなら、明治以前の仇討ちや合戦が全部テロになります。
第 27 問	「赤穂義士実纂」(齊藤茂先生)の本は一代の名著ですが、現在、発見が進んでいる段階で感ずることがあれば書いて下さい。
第 28 問	「吉良上野介」の「浅野内匠頭」に対するいじめはなかった、「織田信長」の「明智光秀」に対するいじめはなかった、と主張する作家がおりますが、あなたのご意見をお聞かせ下さい。
第 29 問	饗応役が戸田能登守忠真に代えられましたが、戸田氏はどうして選ばれたのでしょうか。その要因と思われることを書いて下さい。
第 30 問	討入りの成功を瑤泉院(落合宛)に知らせるための書状が、やや同文で12月9日と12月19日付で2通ありますが、なぜこの2通が存在するのでしょうか。

注意:・文章での解答が多いので、月一勉強会、水曜ゼミなどでなるべく解説をして参ります。勉強会の出席を第一と考えて頑張ってください。

- ・解答が的確でない場合、△印が付く場合がございます。△が2つで1点減点となります。
- ・問題そのものについてのご質問は幾つでも受け付けますので、何度でも聞いて下さい。

## 平成26年中央義士会業務報告

担当 三輪三郎

年月日	項 目	備考
H26. 1. 12	第57回月一勉強会①新発見神埼と五郎資料公開②「武庸筆記」続き	港区生涯学習センター304学習室
3.9	忠臣蔵でお茶しませんか ①新発見の書状 ②大石内蔵助の絵	港区芝浦港南区民センター第2集会室
4.6	第58回月一勉強会 ①「赤穂鐘秀記」という資料について ②「武庸筆記」続き	港区生涯学習センター303学習室
5.11	第59回月一勉強会 ①萱野三平重実について語る ②「武庸筆記」続き	港区生涯学習センター304学習室
5.12	浅野本家文京区弥生町屋敷跡確認文京区弥生2丁目14番異人坂高台	中島理事長
5.18	文科省へ義士会議事録再送付文科省佐々木氏宛	中島理事長
5.22	赤穂市へ口上書印刷利用申請書送付	中島理事長より小野真一氏へ
5.26	中央義士会理事会理事12名中,出席8名	港区生涯学習センター205学習室
6.15	第12回忠臣蔵愛好会谷中霊園、寛永寺根本中堂等散策	柿崎理事
6.24	古文書引き取りについて赤穂市と話し合いを始める	中島理事長
6.27	セブカルチャーネットワーク(旅行社)渡辺晋司氏と打ち合わせ	中島理事長
6.27	書窓展(神田古書会館)参加	中島理事長
7.6	第60回月一勉強会 ①三村次郎左衛門について ②「武庸筆記下巻」読み ③NPO会報4号配布、④記念カップ配布	港区生涯学習センター304学習室
7.9	赤穂市(小野真一)正式に古文書引取り話し合いの通知書送る(発送)	中島理事長
7.9	青春出版社「大石内蔵助の生涯」原稿発送	中島理事長
7.11	泉岳寺施餓鬼参詣	富岡副理事長
7.29	古文書受け入れ開始について、豆田市長より(文書)	中島理事長
8.3	第61回月一勉強会 ①横川勘平宗利について ②「武庸筆記下巻」読付け	港区生涯学習センター304学習室
8.8	第1回東京あこうのつどい於ホテルニューオオタニ	中島理事長他5名
8.15	テレビ朝日旧細川邸撮影	中島理事長
8.19	旧細川邸管理規定出来る	中島理事長
8.25	神田松之丞12月14日公演依頼	中島理事長
9.7	第62回月一勉強会 ①義士中村勘助について ②「武庸筆記下巻」読付け	港区生涯学習センター304学習室
9.14	委員会(中央義士会評議員、「大石内蔵助の生涯」編集委員、NPO法人忠臣蔵 倶楽部 役員)	港区生涯学習センター
9.25	セブカルチャー教室(吉良邸討入り前夜、外廻り)	中島理事長
10.5	第63回月一勉強会 ①義士矢頭右衛門七について ②「武庸筆記下巻」読付け	港区生涯学習センター303学習室
10.14	泉岳寺書院落慶式	富岡副理事長
10.26	第13回忠臣蔵愛好会本所吉良邸跡周辺史蹟巡り	柿崎理事
10.28	「新大石内蔵助の生涯」刊行	中島康夫著
11.9	第64回月一勉強会 ①義士貝賀弥左衛門について ②「武庸筆記」読付け	港区生涯学習センター205学習室
11.28	台東ケーブルテレビ・谷中観音寺で撮影	中島理事長出演
12.13~12.14	元禄市参加	両国
12.14	赤穂義士討入り満312年赤穂義士追憶の集い	泉岳寺



中央義士会

副理事長

富岡 克

東京都中央区在住

中央義士会

評議員

勝田 芳造



家紋  
「蛇の目」

足立区在住

日蓮宗

法耀山 高光寺

赤穂市加里屋一八六一

中央義士会

評議員

金子 堅一

東京都荒川区在住

中央義士会

評議員

成清寛 徽

千葉県浦安市在住

中央義士会

常務理事

萩原 栄

中央義士のホームページは <http://www.chushingura.net/>

中央義士会

会員 杉山 正信

東京都目黒区洗足

中央義士会

評議員

三輪 三郎

川崎市麻生区岡上一四四一―七一  
電話 〇四四―九九九―一五八五  
FAX 〇四四―九九九―五五六八

中央義士会

評議員

内山 晴代

東京都板橋区在住

中央義士会

理事

飯塚 利男

東京都北区中十条一―二―一〇

中央義士会

評議員

上原 益雄

東京都練馬区在住

中央義士会

監事

塚原 裕子

〒一四四―〇〇一五  
東京都大田区蒲田一―六―一八―一四一四

北海道の寒空に夢を見た。  
船橋在住のあの逆転作家さん。シリーズで出版されたのは結構ですが、あれは日本史の単なる個人的エッセーではありませんか。それを史実かの如く発表する出版社が一番「悪」なのです。社会悪です。

小さい時から「本を読め」といわれた。その本を作る出版社の一部に、エボラ出血熱のウイルスを持つている「頭の薄い」編集長が居る。世の中に「毒」を撒き散らしているんですよ。ウイルスを取り除く病院もないのが今の日本なんです。いやいや、あの社長と白髪の編集長が「お詫びの記者会見」をした、あの新聞社の話ではありませんよ。「元禄時代と現代を一緒にする」逆転日本史を発刊した出版社の話です。

アホな作家ほど「土芥寇讎記」を錦の御旗のように発言していますが、あれはレポーターの忍びの者たちが、幕閣のお世辞取りに報告した、まやかしの報告書なんですよ。もっと知りたかったら、わしらの仲間になりなさいな。とかく、世の中は中途半端なインテリが動かしているからおかしくなるんだね。  
あつ、目が覚めた。

北海道の元気な吉田忠左衛門より

中央義士会忠臣蔵博士

理事 吉田泰仁

(北海道函館市在住)

★新入会員紹介★(敬称略)

地区	会員別	芳名
小平市	一般	掛水 仁
伊勢崎市	一般	佐々木倫子
西多摩郡	一般	佐藤 誠
赤穂市	一般	妻井昭二

忌 報

当会創始者福本日南の御子孫、福本精一氏が平成二十六年九月五日にお亡くなりになりました。八十五才でした。

福本精一氏は昭和五年二月十八日生まれ。和光堂に三十七年間勤務し、退職後は趣味の絵を描いていました。今年の二月頃から体調を崩して入院していましたが、九月五日に帰らぬ人となりました。

なお、葬儀には当会から、理事長代理として富岡克副理事長が出席いたしました。  
福本精一様のご逝去をお悼みします。

中央義士会会員一同

編集後記

(一) 元禄事件に関わる研究者は、向後、「易水連袂録」を中心に、元禄事件の再構築をする必要に迫られてきた。小生が生きている内に気づいたのがよかったのか。それとも、「今頃気づいたのか」と、誰かいう方がいるなら、名乗り出てほしい。共に研鑽しようではないか。

(二) この元禄十六年三月の「易水連袂録」を裏付ける「生の史料」が「甚三郎文書」である。幸い「易水連袂録」の現在の持ち主も見つかった。昭和四十九年齊藤茂先生発表の「易水」は、四十年後の平成二十六年に、どうやら扉が開かれようとしている。

(三) 「大石内蔵助らの最大の目的は、内匠頭の墓前に吉良の首を供える事」であったはずである。それを裏付ける「易水連袂録」と「甚三郎文書」の存在は大きいと思う。  
「方々、御賛同下されましようか」

編集者

中島康夫(企画・編集・検証)

荻原 栄(編集)・三輪三郎(校正)

富岡 克(校正)・勝田芳造(校正)

(株)正大印刷社(印刷)